雪国の視座—ゆきつつもる国から

東浦 将夫

書の研究の仕事を離れて、久しぶりに手にした雪水に関する書籍がこの「雪国の視座—ゆきつつもる国から」で見られて驚きました。雪水研究の各分野の第一人者であることが研究されてきた内容を、それぞれ分かりやすく簡潔にまとめられているのが魅力的でした。

本書の構成は以下のようになっています。

自然、社会、経済、技術、文化を含めた雪水に関する幅広い内容が、七分野五十二論点について各六ページに要領よくまとまられているので百科事典のようなです。各論点には、見やすい図や写真が多く示されていて、人名等の説明も随所に示されていて雪水に関する理解が深まります。他方、各論点の頁が限られているため十分説明がされていない部分も見受けられます。必要があれば文献を通じて、さらに詳しく補うことが可能になっています。
第一章 雪と社会

では、住みやすい雪国の再生を目指した政策・雪害対策の経緯を中心に、雪国の気象、風土、雪の法律・制度、雪災害の問題点と防災システム、雪国の都市構造と社会インフラ、雪と道路、雪と鉄道、雪と電力、雪国の医療・福祉体制など雪国の生活のあり方を書かれています。

第二章 雪と経済

では、雪国のあり方を理解し、利雪・克雪のビジネスチャンスの可能性について、以下に示すように雪・雪害対策の振興、雪国の伝統産業の育成・開発、雪の魅力を生かした観光リニューアルによる観光客の開拓、観光からの地域づくり課題、リゾートスキーの新たな発展の方向にむけてどのように示唆にとんだ内容になっています。

第三章 雪と技術

では、多様化する雪害のための雪対策や意識改革、新しい雪技術開発に関して、降雪の科学、気象・雪氷予測技術、交通情報分野と雪情報の技術革新、利雪技術の活用など最新の技術が追求されています。

序章 雪国における二極化

第Ⅰ章 雪と社会

第Ⅱ章 雪と経済

第Ⅲ章 雪と技術

第Ⅳ章 雪国の暮らし

第Ⅴ章 雪と芸術

第Ⅵ章 雪と体験・交流

第Ⅶ章 雪国のあるべき方向を提示しています。

資料編
第四章 雪国の暮らし では、雪国で生活する人々の日常を捉え、雪国時代、雪国の風土、雪国の文化、雪国の風景を描いています。雪国は、雪の恩恵を受けて育まれた土地で、その風情は他の地方とは異なります。雪国の民謡、雪国の料理、雪国の芸術、雪国の芸術、雪国の建築物、雪国の風景など、雪国の特徴的な文化を紹介しています。

第五章 雪と芸術では、雪国で生まれた芸術について述べています。雪国では、雪の美しさを題材にした芸術が盛んであり、特に雪の彫刻や雪の絵画が有名です。雪国で生まれた芸術家たちの作品を紹介しています。

第六章 雪と体験・交流では、雪国で行われる体験・交流について述べています。雪国では、雪の季節に囲まれた特別な体験が行われます。雪国の雪まつり、雪国の音楽会、雪国のワインセミナーなど、雪国の体験・交流は毎年話題にしています。

第七章 二十五世紀の雪国では、雪国の未来について考えています。雪国は、現在の温暖化の影響を受けている地域ですが、それでも雪国の風景は息を呑むほど美しく、雪国の文化は今でも活きています。雪国の未来を守るために、雪国の自然環境を守ることの重要性を強調しています。

以上のように、雪国についての情報は、雪国の様々な側面を捉えており、その中で雪国の魅力を明らかにしています。
忙しい日々を過ごしていました。この施設は、自然に近い結晶を持った雪を人工的に多量に降らせることができ、プロジェクトは存在しない園内には、いくつかの散策道が用意されていて、その植生の変化を楽しむことができます。

雪国の自然を自然のままに残すことが人生の願い、とボランティアの心で作られた植物園である。他所から移された植物は存在しない園内には、いくつかの散策道が設けられていた。雪を人工的に多量に降らせる施設は、管理運営に力を注ぎ、雪水防災研究所に設けるのです。

私の使命は、平成五年末に新潟県長岡市にある雪水防災研究所に転勤しました。その前は、山形県新庄市にある新庄雪水防災研究支所に勤務しており、大型の雪水防災実験棟を研究施設の予算要求と連動した建設と三年間、大変でした。
時期でしたので、単身赴任で行くことに決めました。
それからの四年間は、新しい環境で異なる研究体勢、
研究内容、中核研究者の大学への転出など苦労の連続で
った。他方、土曜・日曜は休日でないので気分転換のた
め仕事を離れ、長岡市内から始めて新潟県内、長野県
内にある美術館、博物館等の施設の見学を始めました。
この雪国植物園との出会いが、行政改革などの厳しい
仕事で疲れ切った心のよろこびとなりました。長岡の滞在
期間中、年に四～五回訪問しました。行く度ごとに季節
にあわせて咲いている里山の可憐な草花が迎えてくれました。
外来植物、園芸植物など一切見られない自然植生を大切
にした自然植物園です。また、蝶、トンボ、メダカ、蛾、
カエル、サンショウウオ、蛇、小鳥などの小動物にも遭遇
しました。小学生のころ一日中昆虫採集で、横浜郊外の
里山を駆け巡った思い出が蘇って来ました。雪国に来てから見
たことの無かった紅色の彼岸花（曼珠沙華）が斜面に咲
いていたのがなぜか印象に残っています。
平成八年四月の雪国植物園開園記念シンポジウムの資料によれば、植物園のイメージは、森林浴ができ、下草に山野草が咲き、小鳥がさえずり、蝶が舞い、トンボが飛び、そして夏の夜には蛻の光がゆれる。野うさぎも、狸もリスもいる。サジバやキジも子育てをしている。こんな形を想像している。すでにカワセミが巣づくりをしている。

現在、雪国植物園は、森林浴を楽しむ事ができる場所を提供している。森林浴は、心の休息と身体のリラクゼーションを提供する。また、植物園は、自然の美を享受することができる場所である。

次回のシンポジウムでは、「自然と人間の関係を深めること」をテーマに、様々な講演が行われる予定。「自然を愛し、自然を守ることが、私たちの使命である」ことを訴える講演が行われる予定である。

最初にこの植物園を訪問したのは、いつものように自然を愛し、自然を守ることが重要であると感じている。自然を愛し、自然を守ることは、私たちの役割である。このシンポジウムは、自然を愛し、自然を守ることの重要性を伝えるものである。
昭和三十年代の高度経済成長期に、社会の構造が大き	く変わり地方の人は職を求めて都会へ出て行きまし	てきていき、里山においても同様に荒廃を余儀なくされまし	た。また、里山においても同様に荒廃を余儀なくされまし	た。昭和五十九年、身近にある里山を市民共有財産として維	持管理し、それを植物園という名門で保護しようとする	市民運動が起こりました。そして、植物園の設立に向け	て、植物園は市民共有の財産という視点から、三つの基	本的事項を考えました。

①植物園は長岡市が所有するべきであり、市が買収すること。
②造園は市民ボランティアリーダーが行い、その会費を低額の入園料で行い、市に負担をかけない。このような主旨で、昭	和六十二年の秋にボランティア会員の募集を行い、その	名称を「雪国植物園同志会」と決定し、百五十名の会員	で翌年四月から作業が始まり、現在は二百七十名の	会員で管理運営されているそうです。

私が、長岡に単身赴任した四年間大過なく過ごせたの	も、雪国植物園の自然からもらった心のよさが大き	いと思いました。このような素晴らしい自然を維持し	ていくのに、行政と市民が協力して進められてこられたこと	を、後になって知りました。私が東北公益文科大学に転	勤してから、この活動がまさに「自然環境と公益の原点	である」と認識した次第です。